

■国際学術講演会

「ナスカとパルパの地上絵と社会<考古学研究の最前線>」

山本睦（国立民族学博物館機関研究員）

2014年2月22日（土）、山形大学小白川キャンパスにおいて、国際学術講演会「ナスカとパルパの地上絵と社会<考古学研究の最前線>」が催された。山形大学人文学部が主催し、国立民族学博物館・科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)、科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」(代表：青山和夫)、および頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」(代表：坂井正人)が共催し、古代アメリカ学会が協力して開催であった。

世界遺産としても名をはせる、ペルー南海岸のナスカおよびパルパ地域の地上絵と先史社会に関する最新の調査成果にもとづいて、国内外の気鋭の研究者から考古学研究の最前線の話しが聞ける重要な機会であったため、参加者は152名と盛況であった。

まず、楠田枝里子氏による特別講演があったのち、マルクス・ラインデル(ドイツ国立考古学研究所)、クリスティーナ・コンリー(テキサス州立大学)、ケヴィン・ボーン(パデュー大学)、坂井正人(山形大学)の4名による講演がおこなわれた。総合司会は、松本雄一(山形大学)が担当した。

ペルー南海岸のナスカ地域やパルパ地域では、近年、考古学調査が活発におこなわれており、その結果として当該地域社会が、同時期にペルーの他地域で存在した社会とは大きく異なる様相を示すことが、次第に明らかとされてきた。そこで本講演会では、ナスカ期(紀元前100年～紀元後600年)だけでなく、その前後の時期に製作された地上絵、神殿、居住地、鉱山といった様々な遺跡の調査成果を通じて、当時の社会組織や環境変化などについて広く論じることで、先史の実態にせまることが目指された。

はじめに、楠田枝里子氏が、これまでに寄与してきた地上絵の保護活動支援についての講演をおこなった。次に、マルクス・ラインデルは、パルパ川流域における地上絵や古環境をめぐる調査を総合して、環境と人間活動との関係について論じた。また、クリスティーナ・コンリーは、ナスカ期とそれに続くワリ期(紀元度700-1000年)やイカ期(紀元後1000-16世紀)を含めた長期的視野のなかで、ナスカ地域における宗教活動について講演した。続く、ケヴィン・ボーンは、神殿ではなく、小規模集落遺跡や鉱山遺跡の調査成果からみた、ナスカ社会の新たな社会像について論じた。そして最後に、坂井正人は、これまでに実施してきた山形大学による地上絵に関する研究成果を総括したうえで、ナスカの地上絵とその社会的役割および社会変化との関係についての講演をおこなった。

以下は、各発表の概要である。

・楠田枝里子

「ナスカと私」

本講演では、楠田氏とナスカとのなれそめが語られ、地上絵研究で有名なマリア・ライヘ氏に魅了されてナスカの地上絵に興味を持ち、はじめてペルーを訪れた時の思い出やライヘ氏との思い出などが軽妙に語られた。そして、ライヘ氏が中心となって実施されていた地上絵の保護活動を支援する目的で、1995年に「日本マリア・ライヘ基金」を設立したうえで、現在も地上絵の保護に寄与しており、パルパ地域での博物館建設に協力したことなどが話された。この博物館には、次に講演するマルクス・ラインデルらのドイツの考古学チームの調査成果が公開されており、地域の人々が文化遺産を学ぶ場として極めて重要な役割をはたしている。

・マルクス・ラインデル

「ペルー南部パルパ地区における気候変動と居住地・地上絵に対する影響」

本講演では、パルパ川流域における集中的な遺跡分布調査と台形の地上絵の内部に位置する石造建造

物の発掘調査、および地上絵の立地の地理学的分析や古環境の研究を通じて、当該地域で行われた儀礼活動やその社会的役割、および環境と人間活動との関係が論じられた。

具体的には、地上絵内部の建造物の調査から、水や豊作を祈願する儀礼の実施、つまりは台形の地上絵が豊穰を祈願するための儀礼空間であった可能性を示した。また、地上絵は、周囲から明確に視認できる場所に立地しており、そこでおこなわれた儀礼が多くに人々に観察されたことも推測された。そして、こうした儀礼活動を含めた人々の生活は、当時の環境に大きな影響を受けていたと考えられる。

・クリスティーナ・コンリー

「ナスカの儀礼と宗教：二千年間の変化」

本講演は、ナスカ地域におけるナスカ期からイカ期におよぶ埋葬の通時的な研究、とくにその埋葬方法や副葬品、および出土人骨の同位体分析から、当該地域の儀礼と宗教の動態を示したものである。

ワリ期の埋葬の分析からは、この時期のエリートが高地のワリ社会から来た人々であり、こうした人々のみがワリ社会に特徴的な埋葬方法や副葬品を持つという、高地の人々によるナスカ地域の直接的支配の構図を明らかにした。また、ナスカ期とイカ期にみられる頭部が欠如した胴体だけが埋葬された人物は、いずれもナスカ地方の人物であることから、首級が豊穰儀礼に用いられたこと、そして首をきられることには社会的重要性が付与されていたと考えられることなどが論じられた。

・ケヴィン・ボーン

「周縁から見たナスカ社会：村落と鉱山からの新たな視点」

本講演では、これまで研究がおこなわれてこなかったナスカ社会の周縁部分、つまりはエリートではない一般の人々が生活していたと考えられる小規模集落や、土器顔料の鉱山の発掘調査からナスカ社会をとらえなおすことでみえてきた、社会構造の新たな側面が論じられた。

集落には複数の経済的に独立した世帯が存在し、各世帯では農耕と牧畜が営まれると同時に、遠隔地の石材を入手するなどして石器を製作していたことが明らかにされた。しかし、ナスカの権力関係や社会構造と深く関わる多彩色土器の製作や流通については、社会的政治的宗教的中心であったカワチの大神殿がおさえており、土器を入手するためには、カワチで執りおこなわれる儀礼に参加する必要があったという仮説が示された。そして、仮説検証には今後の調査の進展が不可欠であることが述べられた。

・坂井正人

「ナスカの地上絵と社会変化」

本講演では、上記三名の研究の重要性および講演内容を整理しつつ、山形大学が中心となっておこなっているリオ・グランデ川流域、とくにナスカ平原における地上絵研究の全体像が述べられた。

具体的には、現在、綿密な測量調査や踏査などによって、地上絵の分布図作成が進み、その時間的位置づけや製作と利用に関わる人々の活動が次第に明らかにされてきている。また、地上絵のある空間は、農耕に適しておらず、水と豊穰に関わる儀礼空間であったと考えられること、地上絵の制作方法について従来考えられてきたものとは異なる手法が用いられた可能性があることなどが、述べられた。そして、山形大学によるナスカ研究の目的や現状、今後の展望に加えて、その研究上の意義が示された。

(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

主催：山形大学人文学部

共催：国立民族学博物館

科学研究費補助金基盤研究 (S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」

(代表：関雄二)

科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（代表：青山和夫）

頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム

「ナスカ地上絵の学際的研究における次世代研究者養成とネットワーク構築」（代表：坂井正人）、
協力：古代アメリカ学会